水細尋常小學校
明治廿二年九月購求
修第一二號
保存期
明治年月迄

改三十五号ノ六

陸

尋常小學校教師用

修身書

第六

明治廿一年四月三版

仁愛　一丁
孝道　五丁
交友　一五丁
廉潔　二四丁
公正　二六丁
節倹　三三丁
忠義　三八丁
學藝　四六丁

謹慎　五八丁
慈愛　六六丁
沈勇　七一丁
學藝　八九丁
負淑　九六丁
悔道　一〇二丁

図書　和図書　遡
a138032931 2a
福岡教育大学蔵書

尋常小學校教師用 修身書 第六

辻敬之
岡村增太郎 同編

明治廿一年五月

教育書專賣所
普及舍

益智書局
學校教科書

例言

一 此ノ書ハ兒童ノ德性ヲ涵養シテ日常ノ作法ヲ教ヘ兼テ尊王愛國ノ道ヲ知ラシメンガ爲內外古今人士ノ嘉言ナル言語ヲ輯錄シメルモノナリ

一 兒童ニ修身科ヲ教フルニハ談話ニ由リテ教師自ラ言行ノ摸範トナラザル可カラズ故ニ此ノ書ハ分チテ教師用ト生徒用トノ二種トナシ教師用ノ書ニハ事柄ヲ掲ゲ生徒用ノ書ニハ其ノ圖畫ヲ掲ゲテ談話ヲ聞クノ傍之ヲ目擊セシメ又其談話ニ對スルノ格言ヲ載セテ之ヲ記臆セシムルモノトス

一 教師用書ノ上欄ニ問答ヲ設ケタルハ教師ガ談話ノ際往々此ノ法ニヨリテ兒童ノ心意ヲ開誘スルニアリ又生徒用書ノ上欄ニ事柄ノ大意ヲ掲ゲタルハ兒童ガ父兄ニヨリテ復習シ若クハ能日自ラ諳讀シテ教師ノ談話ヲ再臆セシムルニアリトス

(二)小女父を勵まして難船を助く

(仁愛)

英吉利のナフスサンダランドと云へる燈明臺の番人にダルリングと云ふ者あり或風雨の曉に海面を打ち望みければ一隻の瀕船逆浪にもまれ今にも沈まんず有樣おればダルリング之を助んと一旦は思ひ立しが風濤荒々しく迚も救ふべきやうおかりければ如何はせんと思案に暮れし折其の娘グレイスは女おがらも父に

(問)汝等他人ノ危難ニ逼ルヲ見バ我身ヲ顧ミズシテ之ヲ救ハンカ將タ躊躇センカ如何

勸め諸共に彼の難船を救はんと云ひければダルリングもグレイスに勵まされ頓て親子共々小舟に打乘り山の如き風濤を犯し辛くして本船に漕ぎ寄せ九人の者を救ふて燈明臺に歸り種々看護してその生命を全くせしめたり此の時グレイスが義勇おかりせバ九人の者は空しく魚腹に葬らるべきを唯一途の仁心より人の危難を傍觀するに忍びず己が身を忘れて人を救ひし義勇の働き誠に感賞すべき事にぞ

(二)己を顧みずして人の危難を救ふ

(仁愛)

亞米利加のヒラデルヒヤにエリーレーンといふ少年ありしがハルテモールとサスハンナとの間に架け渡せし鉄道隧道の燒け落ちたるを見て自ら思ふやう若し滊車隧道の燒けしを知らずして馳せ來らバ數百人の乘客は皆谷の中に陷り死おんとて己が危きを打忘れ滊車の衝路に立塞り兩手を擧げて聲を限りに呼ハりて

これを知らせければ瀛車は其の危難を免れ數百人の人々はエリーレーンが義心の爲めに九死を出でて一生を得たりとて厚く禮謝しけるとぞ

格言

孟子曰く仁は人の心なり義は人の路なり

參照

楚の孫叔敖兒たる時嬉戲して還り憂へて食はず其の母故を問ふ泣て曰く兒聞く兩頭の蛇を見る者は死せと今日吾兩頭の蛇を見る死せる日かけん母曰く今蛇安くに在る曰く兒他人の又見ん事を恐れ己に之を埋む母曰く憂ふること勿れ汝死せず吾聞く陰德ある者は天報ゆるに幸を以てせ人之を聞き其の仁心を感ず

(三)惡漢孝女の假面に驚く(孝道)

丹波の國にひさと云ふ者あり性質純孝あり年

十二三のとき篠山ある富豪の家に下婢とありしが温順にしてよく主人に仕へたり篠山はその郷里を距るゑと五六里ありければ朝夕父母の方を拜し錢帛菓物おどを得れば些少と雖必ゑれを父母に送りけり主家に幼兒ありて或人ゑれに夜叉と婦女との假面一ッづつを贈りしがその母兒が夜叉の假面を見て恐怖せんゑとを恐れてゑれをかくし婦女の假面のみを與へしにひさ此の假面を視て暫し眺め入てありけ

（潤）汝等父母ヲ離レテ他郷ニアラバ事ニ觸レ物ニ接スルニ當リテハ父母ヲ相思ハンヤ否

るが何とか思ひけんゑれを抱きて頻りに泣きければ主人一時ハ笑ひしが又怪みて其の面をひさに與へけれバひさ大に悅びて吾が部屋に藏め置きて日夜朝夕にゑれを眺めゑれを拜する體なれバ主人益怪み或時ひさの他出を窺ひて窃に婦女の假面を奪ひ夜叉の假面を以てゑれに換へ置けりひさは斯くとも知らず歸り來てその假面を見るより大に驚き悲み泣きて暇を賜らんと屢請ふにぞ主人も遂にその意に任

せければひさ直に假面を懷に入れて急ぎ行くこと二里バかりにして日暮れ廣々たる野原を過ぎしに惡漢五六人あり燒火を圍みて博奕して居りひさの往き過ぎんとせるを呼びとめて暫しあたゝまるべしといふにそひさ泣きて辭みけれども聽かざりしかバ心あらずも火のほとりへ寄るに折ふし風吹きて火燄甚しかりしかバひさ懷中の假面を取出しこれをかふりてその烟を避けしを一人の惡漢早く認めてあや

やと叫びつゝ逃げ去るに他の惡漢も始めて心附きこの有樣を見て打驚き叫び狂ひて逃げ亡せたりひさ急ぎ家に歸れバ父母その獨り深夜に歸りしを怪みその故を問ふにひさ答へて先頃主人より婦人の假面を賜はりしがそのかたちよく母樣に似たれば日夜これを拜して悅び居たるに今日遽かに夜叉と變相したれバもしや母樣の身に不慮の事もありしかと打驚きて歸る途中賊に遇ひて云々ありしと委細の始末

を語るにその父は素と村中にて剛の者の聞ゐある男ゐれバ頓て其の地を問ひ糺し松明を照してひさと共にその場所へ往きしに果して金錢の散亂したるを見たり父悉く拾ひ取りて國の守に訴へけれバ吏遂一吟味して是れひさの孝行を天より賞し給へるものゐりとて悉くひさに與へて父母の養育料とゐさしめたりと云ふ

(四)身を節して父に厚くす

(孝道)

尾張國海西郡にそよと云ふものあり父を善六といふ家極めて貧しく漁を以て生業とゐせりそよ年二歳の時善六その妻を離別し者母及そよと三人暮しにて細く烟を揚げしが其の後者母も身まかりたりそよ稍く長ずるに及びて孝心深く日夜苧をうみ機を織りて父を養ひその身は更に粧ひもせず父酒を好みて日々必飲まざるゐとゐければそよ常に錢二十文を奉じて其の資にあてしが或日父他出せしときそよ酒

（問）孝子ノ行ヲ見バ如何ナル感情ヲ催スヤ

のしろ十文を父に出しければ父怒りて何故にその半を減ずるやといへばそは減ぜしには侍らず一時に飲み玉はバをん身を害し玉はんかと氣づかふより後刻又進めんと思ふよしを答へけり又或日そよ外出して父既に十文の酒を飲み盡し日暮に及ぶも酒錢を得ざりしかバ仮を喫せんと欲し桶の蓋を開けバ十文入れてありけれバ父の喜び望外に出でたり父出で醉ふときはその歸の常に晩きをそよ途に迎へ集き

時ハ衣服を負ひ雨降れば簑笠を携へその往く所を尋ねけり或夜路傍に醉ひ倒れ蚊に刺れふがら熟睡をるを見たるが如何にも扶け歸るふと能はざりしかバ急き歸りて蚊張を取りて父の臥したる處にかけ終夜看護して曉に及べり地頭志水氏そよが孝行を聞きて大に感じ租税を除きてその里門に旌表したるに國司も亦金を賜ふて其の至孝を賞せられしとぞ

格言

仲尼の曰く天の性人を貴〜と爲す人の行孝より大なるはなし

參照

清の潘周岱家貧し其の父足を創つけ行に便ならず出て傭するごとに周岱之を負ひて往還を母の家銅山の下に在り泉清洌にして常品に殊なり母病みて夜半飲を思ふ周岱急に瓶を挈げて奔り赴く曙に向ひ已に還る行くこと凡そ四十餘里なり

(五)安東省庵朱舜水を扶助す

(交友)

明朝の滅びたる時明の遺臣朱舜水亂を避けて我が邦に來り長崎港に寄寓してありしが世の人朱舜水の學德あることを知らざりしかば舜水窮をることと甚しかりしに此の頃の儒者に安東省庵といふ人ありてある時舜水を一見してより深く其の學識才德に服し夫より屢往來し

相與に經史詩文を討論して厚く交りけりまた舜水の痛く窮をる樣を見て深く氣の毒に思ひ屢財物を贈りてこれを扶助したりしが遂に己が君侯より賜ハるところの俸給の半額を割きて舜水を養ひ置きけり其の友誼厚情筆紙に盡しがたかりき斯くして歲月を送るうち舜水の才は漸く世に聞こえて遠近に匿れおくありけるに此の頃幕府の親藩水戸中納言光國深く才學の士を愛して遍ねく天下の人才を扶持し殊に

〔問〕朋友ノ貧キ者ヲ扶助シテ他日其報酬ヲ受クベキヤ否

其の藩に彰考館を開きて大日本史を撰をる志ありしかバ遙に舜水の高名を聞きて辭を卑くし禮を厚くしてこれを招かれけるにぞ舜水遂に其の聘に應じて褐を水戸に解き高祿を賜ハりて身に不足おくおりしかバ蠶に貧しかりし時省庵に受けたる恩に報いんが爲め厚くこれに贈りたるが省庵は朋友の相救ひ相恤むは固より報謝を受けんが爲めにあらずとて固く辭して受けざりけり而して省庵がみづから奉ず

るを見れば常に敝れたる衣を着し精げざる飯を食ひ至つて質素の暮らしをありしかば舜水は深く其の高義を歎稱して措かざりしとぞ

(十八)生を母に受け知を友に受く

(交友)

支那國春秋の頃齊の國に管仲といへる人あり年少きときその友鮑叔と遊びしが鮑叔管仲の賢者なるを知り常に管仲の貧困を濟ひたりその後鮑叔は齊の公子小白に事へ管仲は公子糾に仕へたるに小白は立ちて齊國の君となり公子糾は死して管仲囚れけるを鮑叔桓公に薦舉せしかば桓公管仲を用ひてこれに政を委ね遂に諸侯に覇たりされば管仲常に曰く吾始め貧困なりし時或日鮑叔と共に商事を營みその利を分つに多く自から取れりされども鮑叔我を以て貪るとなさず我が貧しきことを知れるが故なり吾又鮑叔の爲めに事を謀りて窮困せしかど鮑叔我を以て愚なりとせず時に利と不利

(問)人ノ賢愚ハ小過失ニ因リテ知ラルベキモノナルヤ如何

あるゝことを知れるが故なり吾三たび仕へて三たび君に逐はる鮑叔我を以て不肖とおもはず我が時に遇はざるゝことを知るが故なり吾三たび戰ひて三たび走れり鮑叔我を以て怯なりとおもはず我に老母あるゝことを知れるが故なり公子糾敗れて召忽ゝれに死し吾囚はれて辱を受けたり鮑叔我を以て恥なしとおもはず我が小節に羞ぢずして功名の天下に顯れざるゝことを恥るを知るが故なり我を生む者は父母我を知る者

は鮑子なりと鮑叔管仲を公に薦めてその身ゝれに下り子孫世々名大夫となれりされば世の人管仲の賢を譽めずして反て鮑叔を譽めたり

格言

古諺に曰く人は窮して友を知る

西語に曰く患難の時に當りて其の交情を顯はす者は眞に信義を重ずるの朋友なり

參照

吳の國に延陵の季子と云ふ人あり或時其君の使にて他國へ往き道にて徐の君に遇ひ物語しけるが徐の君熟季子の劍を見て口には言ひ出でざれども得んと欲する氣色面に顯はれたり季子心には察されども今君命を奉じて他國に行く道なればと思ひて與へずさて使の事終りて歸路に立寄りて見れば徐の君已に死したりし故彼劍

を其墓の側の樹に結びつけて歸るを從者怪みて徐の君は已に死したり然るを今墓にかけて誰に與へ賜ふぞといへばさきに吾心の中にて與へんと思ひける事なれば縱令其人死したりとも初の志を變ずるに忍びずと言へり凡べて人の人たる所以は信義を失はざるにあり季子の行は過ぎたりと雖朝に刎頸の交をなしてタには仇讎の如く相惡むものも世にはなきにあらず

李子の志を變ぜざるに比ぶれば豈雲泥の差異あらずや

(七)童子隣家の果を拾はず

(廉潔)

トウマスと云ふ童子其の姉マチルダと庭園に遊び居りしが姉に語りて隣家の林檎はよく熟したり大風吹き來らば必此の庭園に墮ちん其の時余は之を拾ふべしといふに姉は之を戒めて假令余が庭園に墮ち來るとも決して拾ふべ

(問)隣家ノ果我園ニ落ツル時ハ汝等如何之ヲ處スルヤ

からず彼林檎は汝が所有にあらずして隣家の所有なり然るにこれを拾はんと欲するは實に不正の所業なり汝瑣少の事なりとも正直を守るべしと諭しけれバトウマス之を聞き愧る色ありて然らバ其の林檎を隣家へ投還すべしといへり此の語些々たる事なれども能く其の意を味はへバ此の姉弟が義氣あること感服するに堪へたり

(八)渴して梨を食はず

(廉潔)

元の時代に許衡といへる人あり河南を過ぎしが暑中のあとにて喉痛く渇きし折道の傍に梨の樹あるを見たり同行の人々争てこれを食ふに衡獨り顧みざりしかば或人その故を問ふに衡答へて吾が有にあらざる物を妄りに取るべからずといふ或人又いへるやう世亂れて持主なし何の憚りかあらんと衡聽かずして假ひその持主おきも吾が心に持主ありといへり衡家貧くして自ら耕作ま栗熟するときは栗を食ひ

（問）持主ナキ品ハ之ヲ取ルモ妨ナキヤ如何

熟せざれば粃或は茶を食ひ泰然としてその貧きを憂へず讀書の聲常に戸外に聞ゆ財餘りある時は一族及書生の貧きものに分ち與へ又受くべき義おくして人より遺りたる物は一毫たりとも取らざりしとぞ

格言

論語に曰く富と貴とはこれ人の欲する所なり其道を以てせずして之を得ざれば處

らざるなり

参照

東漢の樂羊子遺金一餅を路に得たり以て妻に與ふ妻の曰く妾聞く士は盗泉の水を飲まず廉者は嗟來の食を受けずと況んや遺をひろひ利をもとめて其の行を汚さんや

(九)舅犯虞子羔を薦む

(公正)

春秋の頃晉の文公といへる君ありその臣舅犯に誰をか西河の守護とすべきと問ひ給ふに舅犯答へて虞子羔然るべしといふ文公不審にをぼしてそは汝の仇ならずやといひ給ふに舅犯は君は只守護を問ひ玉ふ臣が仇を問ひ玉ふにあらざるべしといふ子羔その事を聞き舅犯に謝して君幸に臣が過を赦して西河の守に薦め玉へるゑと辱けなしといへば舅犯答へて子を薦むるは公なり子を怨むは私なり吾は私事を以て公議を害せず子早く立ち去るべしといひ

けるとぞ

（一〇）仇を避けず子を避けず

（公正）

是も春秋の頃晉の國の大夫に祁奚といへる人あり年老いたれバ晉君祁奚に向ひて子が職を嗣ぐべき者は誰かよかるべきぞと問ひけるに祁奚答へて解孤おりといふ晉君そは子の仇おらずやといふに祁奚君可あるものを問ひ玉ひてその仇を問ひ玉ハざるが故に斯く答へ奉り

（問）人ヲ撰擧ヘルニ其人已ノ好マザル人ナラバ才幹アリト雖之ヲ薦ノンカ如何

たりといふ晉君その言葉を用ひて解孤をその職に擧げられけるのち又誰をか國の尉とそべきやと問ひけるに祁奚午を以て任じ玉へといふ晉君午は子見にあらずやといひければ君その任に宜しきものを問ひ玉ひて子を問ひ玉はざれバおりといふされバ時の君子祁奚を評して外は仇讎を避けずして擧げ内ハ親戚を避けずして擧ぐ祁奚の如きは至公といふべしといへりとぞ

格言

古語に曰く私事を以て公議を害せず

参照

青山忠俊酒井忠勝と相善からず忠俊卒して子宗俊大坂府尹に擢らる是日阿部忠秋を城中に見る忠秋其の袂を攬りて曰く今日の慶は讃州の力なりと宗俊直に忠勝の邸に至りて謝を致に忠勝驚て曰く公命な

り何ぞ謝せるまとあらんと時に忠勝讃岐守たり

(一一)軍装の美麗は滅亡を招く

(節儉)

源頼義奥州征伐の折その從軍の士に日置九郎といへるものあり甲冑その他の装束甚麗しかりしを見て頼義忽顔色を變へ憎むべき汝が狀貌かかゝる美麗の甲冑を着けなバ必その身を亡さん速にこれを賣却せよされども吾が官

(問服装ヲ修飾スルト心ヲ修ムルト孰レカ優レル)

軍の陣營に於て賣るべからず敵の陣に持ち往きて賣り與ふべしといひければ九郎畏まりて退きしが他日又美麗なる軍裝にて陣中にありければ頼義怒て汝いまだその身を亡ぼすことを曉らざるや速に人に賣り與へ着用を可からずと叱りければ九郎其の後黑き甲冑の最も古びたるを着したるに頼義視て大に喜びて軍士たるものはかくあるべき筈なり此度の用心目出度ことなり軍裝を美麗にするが爲め財を費さ

ば家貧しくなりて勇士を養ふべき資力なく敵にあふて亡び易きものなりといひしとぞ

(一二二)晏嬰弊車に乘る

(節儉)

支那國春秋の時齊國に晏嬰といへる人あり弊車に乘り駑馬に駕して朝參せしかば其の君景公見てさてもく夫子の家祿寡き故か何とてかゝる粗末なるさまを致さるゝにやといひけるに嬰對へて臣君のをん蔭を以て一家三族を養ひ朋友知己の者皆生活を得且臣暖衣飽食を

（問）衣服器物ハ分限ニ應ズベキカ如何

るゝことを得たり弊車駑馬も臣が身に於て滿足ありといふ景公梁丘據に仰せて輅車乘馬を遣りしに嬰拜領せざりしかば公不興氣にて嬰を召し夫子若し受けられずば向後寡人も亦乘らずといひけるに嬰答へて君は臣をして百官の上に立たしめ給ふその衣服飲食を節儉して齊國の人に先ずるも猶奢に流れんゝことを恐れ候今輅車乘馬は君の召ものあり然るに臣も亦ゝれに乘らバ下民義を知らずして必衣食に移らんといひければ景公遂に嬰が言葉に從ひけり

格言

明太祖の曰く珠玉寶にあらず節儉これ寶

太田元貞の曰く驕奢の心は家を破り節儉の心は身を存す

參照

後三條帝即位の初風俗華侈に流れ下吏の

車と雖飾るに金を以てせ尙其の弊を矯めんと欲し嘗て石清水に幸せ都人出でて鹵簿を觀る車金飾あれバ帝爲めに輦を駐め命じて之を剔去せしむ

(二三)父子共に君に代りて死す

〔忠義〕

事に臨みて難を辭せず身を殺して節を全くせるは臣子の義なり元弘三年村上彥四郎義光は其の子義隆と共に護良親王に從ひ吉野の城に

籠りたるに東國の賊軍四方より攻め圍みたりけれバ城兵多く討死し宮も今を限りと思し召して親ら短兵にて切り廻りたまへり是の時義光ハ追手の木戸に戰ひけるが敵の箭十六筋を鎧に折かけて勇氣撓まず宮の御前に畏まりて賊勢益盛に候へバ宮は一方を擊ち敗りて落ちさせたまへ但御跡に止まりて戰ふ者無くバ敵兵君の御後を追ひ參らせん恐れあれども御召の錦の直垂と御物の具とを賜はりて御名を冒

（問）君危急ノ場合ニ臨マバ己ノ一身ヲ重センカ將タ君ヲ重ズルカ

し奉り暫し賊を欺き鉄はんとて御鎧の上帶解き奉れば宮はいおみかねて涙おがら落させたまへり子の義隆は今年十八歳おるが父の自殺せん時同じく腹切らんとはせ來りけるを義光止めて父子の情はさる事おれども徒に死せむよりは宮の御行方見はて參らせむにおかじと辭を盡して誨へけれバ義隆力おく宮の御供せり義光櫓に上り遙に宮を見送り奉りて思ひ定めたる如く腹かき切りて仆れけれバ賊軍おれを見て宮の御自害おり我先に御首を賜はらむと圍を解きて集り來る其間に宮は引違へて落させ賜ふを吉野執行の兵五百騎計にて道を遮り奉れり今は遁れ得させ賜ふべくも見へざりける故義隆一人蹈み止まりて半時計支へけれども其の身十餘所の創を蒙りたり今は宮も遠く落のびたまひしおらん賊の手にかゝりて死おんよりはとて一叢の竹の中に走り入りて腹かき切りて死したり此の間に宮は虎口を脫が

れて高野山に落させ玉へり義光父子の忠死いひたつるもおかおか愚おりと謂ふべし

(一四)烈婦子を失ひて悲まず

(忠義)

延元の亂に瓜生保其の弟義鑑、源琳、重、照、兄弟五人共に脇屋義治を奉じて主將とおし越前の國杣山の城に據りて在りけるが敵將高師泰と戰ひて保、義鑑等死したりしかバ源琳、重、照、等散卒を收めて再杣山に還りたるに城中の士卒殘れ

るものいくばくもおけれバ皆力おげに見へたるを保等の母聊も憂ふる色おくして義治の前に杯を持出でて云ふやう妾が兒等不肖にして此度の戰に敗を取り君の心を傷ましめたり然れども幸に二子死したれバ少しく罪を謝せるに足れり兒等もとより君の爲に事を擧げたるうへは意の如く賊を平げたらんにはたとひ千百の子を失ふとも妾に於て更に悔ゆる所おし今三子猶存してあれバ再び事を擧ぐるに足れ

〔問〕忠義ノ爲ニハ如何ナル物ト雖惜ムニ足ラザルカ如何

りこれ妾が哀を轉じて喜とする所ありとて酒を勸めたりければ是を見て感激せざるものはあかりしとぞ婦女子の性として何事も一たび敗るゝ時は其の氣忽ち沮して志を喪ふ者あるに此の人寡婦の身として忠義の志厚く愛子二人を失ひても再擧を謀りて聊も屈せず義治が將に挫けんとする英氣を勸め起したる其の忍耐の强き男子も耻づる所あらずや

格言

唐鑑に曰く疾風に勁草を知り板蕩に忠臣を知る

參照

晉の嵇紹侍中となる惠帝北征し王師敗績を百官待衛悉潰散せざるはなし紹身を以て捍き衛る兵御輦に集り飛箭雨の如し紹遂に害せられ血帝衣に濺ぐ事定るに及びて左右衣を浣ハんと欲に帝の曰く此嵇侍中の血あり去るゝと勿れ

(一五)「ベンジヤアミン、フランクリ」ンの勤勉精志

(學藝)

「ベンジヤアミン、フランクリン」ハ北米ボストン府の蠟燭屋の子なるが家固より貧窮なれバ幼きより活字版を摺る職人となりたり此の「フランクリン」は甚讀書を好みて金を得るごとあれバ悉くこれを拋ちて書籍を買へりされど唯書物に耽るのみならず其本職たる活版にも亦よく出精し平生の活計に儉約を守りて徒に月日

(問)學藝ヲ成サント欲メル者ハ生計ノ業ヲ拋擲スルモ可ナルヤ否

を費せしごとし年十七歳の時ヒラデルヒヤに行き「ケイメル」といふ人と共に活字版の業を開きしが「フランクリン」固より非凡の才子なるがうへ勉強も亦一と通りならざれバ年尚若しといへども文を綴り書を作るに往々名文を作り出して人を驚かせし事ありされば或時の事なりしがヒラデルヒヤの奉行某「フランクリン」の書きたる手紙を見て其の文章に感服し態同人の旅宿に行て自からこれを迎へ私宅へ案

内せしことありしといふ其の後「フランクリン」は英吉利の都ロンドンへ渡り處々の活版局に行きて其の職を勉めたるが朋輩の職人等ハ時々金錢を費して酒を飲むことあれども「フランクリン」は一滴の酒をも口に付けざれバ氣分は常に爽快にして身体も至て強壯なるのみか貯への金ハ常に他人より多し年二十歳の時ロンドンよりピラデルヒヤへ歸てまた彼の「アイメル」と共に活版の仕事を始めたるが舊に替らず

業を勉めて怠たらず毎日樣々の仕事に氣を配りたる其の間より一枚の活版を植ゑざることとおしされば世人も「フランクリン」が行狀正くして職業に勉强し何事を誂にても間違おく思のまゝに將明くことを悅びて頻りに注文をる者多く家事益繁昌をるに至れりこれより「フランクリン」は新聞紙の出版を始めたるが其の文章妙を盡くして人を悅バしめたるより天下一般に流行して利潤を得ること少おからざりきさて

ど「フランクリン」は金錢の爲に行狀を亂さず常に粗服を着て儉約を守り更に外見を憚るゝとおく時としては新聞紙に用る紙の俵を車に積み自らゝれを押て市中を往來せるを見受たるものありし程おりとぞ新聞紙の出版も既に繁昌に至りたる後又文房具を商ふ店を開き同志の人と會社を結で多く書物を集め「プウアリチャルド、アルマナック」といふ書物を毎年一册づつ出版したり此の書は多く人の心得とおるべきゝとを記したる名文にて大に世間の益を爲したり「フランクリン」は斯く仕事を勉めて數年の間片時も暇おかりしかどもまた能く一身の德義を修むるゝとを懈らざりしかば年三十歳の頃に至りては大に都下の人望を得て會議所の書記官に命ぜられ翌年は又昇進して驛遞局の官人とおれり斯く才德既に身に不足おかりしかど猶世人の爲に益を爲せを以て已の義務おりと思ひ究理學の社中を結びて少年輩を教

ふる大學校を開き火災請合の法を工夫せしおど凡ヒラデルヒヤに於て市中一般の仕事には「フランクリン」の關らざるなしとおかりき「フランクリン」既に老年に及びて北亞米利加の諸州其の本國なる英吉利と不和を生じ數年の合戰にて遂に亞米利加の獨立をおしたるに遇ひぬ此の騒動の時にも「フランクリン」は亞米利加の謀主とおりて其の功少おからず亞米利加新政府の使者とおりて佛國に行き國主に拜謁して援

兵を求めしが其の談判の賤からざりしは云ふ迄もおく其の動作活潑にして輕躁おらず博識多才にして明辯流るるが如くおりしかば其の高名を聞き其の容貌を見ておれに心醉せざるものおかりしとぞされば其の頃佛蘭西の人おれを稱して眞人新世界より來りて其の靈を顯はしたりといひけるとかや

(一六)貝原篤信の博學篤志(學藝)

貝原篤信ハ益軒と號を筑前の人にして國主黑

〔問〕著書ハ徒ニ名譽ノ爲ニセンカ將タ世ヲ益スルコトヲ勸メンカ

田侯に仕ふ幼より警敏にして殊質あり中年に及び京師に入りて學を講ずるに都下の名彥みな心を傾けて之に下だり博學洽聞を以て名海内に重ぜらる篤信好みて書を著を世を救ふの心實に苦ごろおるを以て其の著はを所の百有餘種多くは書をるに國字を以てし語極めて懇切あり田畯紅女童兒隷卒皆ゑれを便ありとを又攝生を善くし老に至て猶矍鑠として衰へず其の屬綴をる所のもの少からず六十にして和

〔問〕學問ハ唯博洽ヲ勸メンカ又ハ標準ヲ定メテ之ヲ學バンヤ

漢名數增補を作り六十七にして大和廻りを作り七十四にして筑前續風土記及點例を作り七十五にして諸茶譜を作り七十九にして大和本艸を作り八十一にして樂訓を作り八十四にして養生訓を作る其著をとゑろの愼思錄に謂へるゑとあり魏志に曰く胡昭怡々として愛せざるゑと無し僕隷と雖必禮を加ふ年八十にして書籍に倦まざる者胡徵君に於て之を見ると篤信謂らく胡昭愛敬の德量及ぶ可からず以て法

と爲せべし八十書を讀で倦まざるが如きは吾
輩羣ありと雖も亦日夕手卷を釋かず是企及せ
可しと爲せと此篤信自ら其の實を記せるあり
篤信の人とあり謙恭純篤あり其の言に吾幸に
朱子の後に生れて其の書を窺ふことを得たり
是無窮の幸又罔極の恩と謂ふ可きあり故に吾
之を敬せること神明の如く之を信ずること耆
龜の如しといへり蓋し其の始めは陸象山王陽
明の説に取り後ち朱熹の學に歸依せしを以て

ありとぞ篤信八十五にして沒せ

格言

勞作は身體を敎養し學習は
心靈を敎養す
休彌爾列爾曰く世界は大學
校なり困苦は良師友なり

參照

吳の闕澤は家世々農夫あり澤に至りて學
を好む居貧して資あし常に人の爲に備書

じ以て紙筆に供せ寫せ所既に畢れバ誦讀も亦遍し師を迫ふて講論し群籍を究覽し兼て歷數に通じ大に名を顯はせ

(一七)鈴木宇右衛門の賑恤

(仁愛)

昔天明八年に饑饉ありしが陸奥ハ分けて甚しく人民餓ゑ死せるもの多く其の死せざるものもみな流離四散して各地に糊口の道を求めしが出羽は隣國とて來りて食を乞ふもの極めて

(問)凶年饑歲ノ時人ヲ賑恤スルニ當リテハ我ガ身ニ不自由ナキ以上ハ衣服器財ヲ失フモ厭ハザルベキカ如何

多かりき茲に出羽の鶴ヶ岡に鈴木宇右衛門といふものありもと庄内藩の小役人なりしが專ら節儉を勤めて能き程の儲蓄もありしかバ職を辭して歸農してありけるが悉く私財を拋ちて饑民を賑はし剩さへ田園家財までもみな賣代なして散してけり宇右衛門既に斯の如くなれバ妻もまた仁惠の心甚深くわが身に添ふとゑろの衣服器財悉く賣代なして賑恤の資に充て既にして僅に新らしき衣二

枚のみを餘しけるがこれをも賣らんといふを宇右衛門押止めておべての女の性として衣服を貴重するものゝるに御身悉くこれを代おして惜しむ心おきは感ずるに餘りあれど女の他出せるに淨き衣一枚もあらざれバ便おしといふに妻は否とよ妾ハ既に他出せんと思ふ念あらねば淨き衣も何にかハそべき若かじこの代をもて兩三人の餓を救ハんにはとて遂にこれをも代おしけりある時十一二歳バかりおる乞

食乞女の門に立ちたるありしが折しも冬の半にて殊に此の日は風雪烈しく厚き衣を重ねてさへもおほいと寒きに件の乞食乞女は切れ破れたる單衣ただ一重着たるのみにてふるひ居るを妻はつくづく見て如何にも衣を與へんと思へど既にみおゝ賣り盡したる後にて如何とも詮そべおし乃我が娘の十二歳おるを招きていふやう其の方は彼れとは年の頃齊しきに彼れハ縞縷の一重ただ一つ着たり其の方は綿入二

つを重ねたれバ須らく一重を脱ぎて彼れに與へよといふに娘もまた父母に似て慈善の心深かりけれバ急ぎ衣一つを脱ぎておれを與へけるにそ夫婦はいたく喜びて娘の怜悧を譽めけるとあん

(一八)粟を募りて流民を活濟す

(仁愛)

宋の富弼は字を彦國といふ河南といふ處の人なるが朝廷に仕へて青州の知事となりし時河北の地大水ありて人民諸方に流落し青州へもさまよひ來るもの多かりしかば富弼青州の民に諭して粟を出さしめ凡十五万斛あまりを得たればおれに官廩の米を益し加へ處々に積み貯へて流民を賑はしまた公私の廬舍十餘万間を得て流民を住ましめ山林河澤の利は得るに隨ひておれを取らしめ不幸にして死したるものをバ大なる塚をつくりて合せ葬りなどし撫恤至らざるとおろなかりしに明年に至り麥作

〔問〕已官吏又ハ富有ノ地位ニアリテ人民ノ饑餓ニ困ムヲ見バ如何處置スベキヤ

大にみのりしかバ斯くては本國に歸りて農業をおさんにも飢渴に苦しむことあるべからずとて各其の本國の遠近によりて粮食を與へ盡くし流民を送り歸したりされバ富彌の惠によりて飢饑凍餒を免れたるもの五十餘萬人に及びたり時の帝仁宗ゑの事を聞召されて大に富彌の計ひを感じ思され直にゑれを召して禮部待郎の官に昇進せしめられしとぞ

格言

佛蘭克林の曰く眞正の忠愛は世上の益を爲す

參照

服部宗賢は攝津の人なり性儉にして仁惠を好み豐年に遇へバ財を抛ち米穀を買ひ飢歲にハ價を賤くして賣れり貧民其の恩惠を受けて饑餓を免るもの多し高取川洪水の爲め毎毎橋を壞り人民之に苦しむ宗賢貲を擲けて石梁を造る是の年會豐稔ゐ

り故に人其の橋を豐年橋と稱に

(二九)織田右府人を細微の末に察す

〔謹慎〕

右大臣織田信長公ハ恒に人を細微の末に察せられたりある時自ら十指の爪を剪り侍臣森蘭丸に命じて其の剪餘を改めしめたるに蘭丸左右を搜索して稍久しくおれども立去らず信長誚りて汝何故に退かざると問ひ玉ふに剪餘既に丸を得たれども未だ其の一を見出し候はず

（問）男兒タル者ハ些細ノ事ニ意ヲ用フルニ足ラザルカ如何

といふ信長乃起ちて雙袖を振り玉へバ爪の片一つ墜ちたり是に於て信長大に蘭丸を賞して人は心を用ふるゑと當に此の如く縝密おるべしと申されけるとぞ

(二〇)石田三成の機敏

〔謹慎〕

關白豐臣秀吉ある時鷹を野外に放ちたるゑとありしが渴をるゑと甚しかりければ一僧院に投じて茶を乞ひ玉ふゑと太だ急おりしに一人の行童大おる椀に茶を酌みて進めけるに微温

〔問〕渴者餓者ニ飲食ヲ進ムルニハ注意ヲ要スルヤ

にして盛るおと七八分に到れり公一喫して快と稱せらる其の後更に一椀を進むるに少く熱して半椀に滿たず公徐ろに喫し了りて又一椀を求め玉ふ是に於て代るに小椀を以てしたり太だ熱くして遽かに喫をべからず公行童の敏才あるを愛してこれを寺僧に請ひ携へ歸りて侍臣とおし漸く愛寵し玉ひぬ後竟に五奉行の列に加はれり石田治部少輔三成是あり一歳暴かに雨ふりて澱川の水漲り溢れ隄防を壞りたるに三成奉行して急に京橋の畔ある倉庫を發き米苞數千百を出し土民に命じて運搬せしめ以て其の壞るる所を塞ぎたり其の後雨歇み水退くに及び三成令を下して速に土俵を造りて米苞に換へたらんものには米ハ取るがままに與ふべしとありければ土民爭て之に趨き隄防日ならずして成就したり且其の堅實ある未壞れざるの前に過ぎたりとぞ

格言

先哲曰く細行を常に慎するものは大事を處するも亦過少し

老子曰く天下の難事は必易きに作り天下の大事は必細きに作る

參照

唐の穆宗柳公權が書跡を見て之を愛し問て曰く卿が書何ぞ能く是の如く善きや對て曰く筆を用ゆるハ心に在り心正しければ筆正し

(二一)翰回善法を創めて邦人を惠む

〔慈愛〕

英國の若那士翰回は波都毛上に生れたり年十七の時力斯本に往き商家の弟子となりしが能く職業を勉め約束を違へず正直堅實なりしかば衆人に愛敬せられたり翰回は性質慈愛深く己が費用を儉約して仁善の事に用ひ倫敦の大道

〔問〕隣國襲撃ノ時ニ當ラバ其人民タルモノ如何ナル義務ヲ盡スベキヤ

を修造し又法國より軍勢攻め來るとの風説ありしかバ水軍の義兵を備へんが爲め一社を設け數万人の義兵を會社にて教練し海軍に入らしめ又毎年貧家の童子六百人を懇懃に教育して水夫とおしたり倫敦の育嬰館といへるは棄兒を養育をる社おりしが貧人の父母その兒を棄るもの日日多く弊害少おからざりしかバ翰回おれを改めんと思ひ倫敦中の貧人院に往きその有樣を探り又佛蘭西荷蘭の國々を遍歴し

て貧人院を檢査し五年の間艱難辛苦して一書を作り嬰兒を保存をと云ふ律例を定め公許を得ておれを行ひければおれよりその功德によりて數千人の嬰兒生命を保ちけりある日モントリールブフッヂタウンバーバードスに大火ありければ俄に志ある人人より金錢を集め罹災者を救助せりかく翰回が仁慈の心かくれおかりしかバポアレイと云へる人倫敦の住民を引き連れ宰相ピユートの家に至り翰回一身を

忘れて國人を利とるゝと大おれバその功を賞せられたしと願ひければ翰回遂に海軍監督使の役に擧げられたり

(一二)一人の精誠能く萬人の奴隷使用說を廢す

(慈愛)

昔し英國にては亞非利加州より黑人を買來りてゝれを奴隷とおし其の終身を束縛して主人の隨意の迫使ふゝとありしが倫敦大砲局の書記官を勉むる「シャープ」といふ人大に之を憐み

(問)仁愛ヲ行フニモ亦剛強ノ氣ヲ要スルカ

何とかして此の弊風を改めんと思ひ居たるが或時一人の黑奴あり烈しく使用せられたるよりして兩眼を失ひ且跛とおりけるに主人より逐出されて已むゝとを得ず乞食とおりて市街にさまよふを見て深くゝれを憐み直にゝれを救ひて醫師に托し療治せしめて後他家の傭人に住込ませたるに舊主人此の事を聞きて再ゝれを苦使せんと思ひ市尹の廳に訴へ出でて遂に此の奴を捕へ獄中に下したりしが黑奴は深

く悲みて書を「シャープ」に贈りてこれを告げたれば「シャープ」直に監獄に往き自ら保證人となりて黒奴を家に連歸りたりしかるに舊主人よりこれを取り返さんことを裁判所へ訴へ出でければ「シャープ」は誓ひてこれを救はんとて此の事の代言を數多の代言人に賴みたれども皆「シャープ」の方を直からずとしてこれを引受けんといふものなかりしのみならず當時著名なりし檢事長に至るまで「シャープ」の論を非なり

とせしかば「シャープ」は是我が法律を知らざるによりて敗訴となるものなりとて繁忙の間より閑を偷みて晝夜法律を研究し遂に奴隷賣買の非道なることを論じて一の書を著はしこれを世の法律家に贈りたるに其の論如何にも純正なりしかば皆これに屈伏してはじめて黒奴を救ふことを得たり是よりして「シャープ」は度度政府に出頭して黒奴使用を止めんことを論じたるに遂には先の檢事長迄も其の論に屈服

して遂に黒奴賣買の事を禁じたりとぞ

格言

西諺に千言の法律は一片の慈愛に如かず

參照

小倉三省一日獄を斷じ罪死に抵る而して事情炎に出るを以て州外に放つ放つに臨みて愴然として曰く寒時服單かり恐くハ途に凍餓せんと袍酒食を與へて去らしむ

其の人流涕して曰く我罪を犯し罰を受く固より當れり寧ろ死をとも此の恩を忘れんやと感泣して去る

(二三)象笏賊魁を打つ

(沈勇)

唐の代に段秀實といふ人涇州刺史の官と爲る此の時郭子儀副元帥と爲て藩に居り其の子晞撿校尚書を以て行營節度使を領して邠州に屯を其の部下の士放縱不法あるのみあらず邠人の惡を嗜む者ハ賄賂を納れて名を卒伍の中に

（問亂人ト雖談心ニハ敵セザルカ如何

入れ是に因て志を肆にを吏恐れて向はざるを以て白晝市街を群行して押借り强盜し少しく心に恊はざるゑと有れバ輙ち市人を擊ち傷つけ器物を毀り肆店を損ひ甚しきは孕婦を撞害をるに至れりされど邠寧の節度使白孝德も敢てゑれを効をるゑとゐかりしに段秀實自ら請ふて都虞侯に補せられ窃に亂兵を制せんとをる志あり俄にして郭晞の士十七人市に入て酒を呑み酒翁を刺し釀器を壞りしかバ段秀實士

卒を列ねて之を捕へ皆ゐ首を斷て市門の外にかけたり是に於て郭晞が營中大に譟で士卒皆甲を着け節度使の陣へ押寄せ來らんとをる氣色ゐりけれバ白孝德大に恐れけるに秀實自ら往て之を解かむと請ひ老健者一人を選びて從者とゐし郭晞の門に至り打笑ひていひけるは我が如き一老卒を殺をに君等何ぞ甲をるゑとを用ひんや我吾が頭を戴いて來れりといふに兵卒皆大に驚きけり段秀實因て之を曉してい

ひけるは尚書は若が屬に貧きたるゑとありや將た副元帥若が屬に貧きたる事ありや奈何ぞ郭氏を敗亂せむと欲をるといふ頓て郭晞出て遇ひしかバ段秀實またゑれを諭して副元帥勳功天地に塞がる當さに始終を全くをるゑとを念ひ玉ふ可し然るに今尚書士卒を放ちて暴行を爲さしめ玉ふ此の如くして已まずバ行々旦に亂を致さんとを其の亂起らバ罪副元帥に及ぶべし然らバ則郭氏の功名其の存をる者幾何

かあらんと其の言未畢らざるに郭晞再拜して いひけるは公幸に晞に教ふるに道を以てし玉ふ敢て命に從はざらむやとて左右の兵卒を叱り懲らして皆甲を解かしめ且つ令を下して敢て譁くをる者は斬るべしといふ段秀實また某未哺食いたし候はず願くは具を設けられよとて食を乞ひ已に食し畢りてまたいひけるは某俄に疾作れり願くハ門下に宿せむとて遂に軍中に臥したり晞大に其の大膽に駭き候卒を戒

め柝を擊ちて之を衛らしめ旦に與に俱に白孝德の許に詣て部下の士卒の亂暴を謝しけり後段秀實司農卿と爲る會朱泚といふもの反して長安に據り騎を遣はして之を迎へしむ秀實子弟に向ひ吾當に死を以て社稷に殉ゆべしとて往て朱泚に見え天子を迎へむ事を勸めたるに朱泚默然たりしが段秀實其の可かざるゆとを知り乃陽に與に合して陰に朱泚を圖らむと欲するに朱泚ゆれを知らず其の黨及段秀實等を

召じて事を計り語僭位に至るに及で秀實勃然として起ち象牙の笏を取り前みて朱泚の面に唾して大に罵り狂賊吾汝を斬て萬段とおさざるゆとを恨む豈汝が反するに從はんやとて笏を擧げて朱泚の額を擊ちしかば朱泚の黨泚を助けて脫走せしめ遂に秀實を殺したり

(二四)一言亂人を折く

(沈勇)

藤原光賴人と爲り勇剛おり平治の亂に右衛門督藤原信賴既に大内に據り天皇及び上皇を幽

(問)人ヲ服スルニハ威力ト正義ト孰レカ可ナル

し自ら大臣大將と爲り詔を矯め公卿を召して會議を光頼時に左衛門督たり是に於て束帶して入る乳母の子藤原範能をして甲を衷して從はしむ誡めて曰く即事急あらバ亟かに吾が首を取れ殿に上れば信頼衣冠乘輿に擬して上坐に居り公卿皆之に下る光頼曰く坐何ぞ位次あきや直に信頼の上に坐を信頼畏怖して色沮を光頼笏を正して曰く聞く今日の會議召に應ぜざる者は誅せられんと抑議をる所は何事ぞ衆

敢て對ふるもの莫し信頼竟に一言を出さず光頼曰く吁朝參謬れり乃徐に起て出づ將に出むとするとき弟惟方を召て其の賊に黨するを讓め命じて二宮を護らしむ庭上の兵士光頼を目し私に相謂て曰く大剛あるかな斯の公事起てより敢て右衛門督に抗するもの莫し獨り斯の公能く其の上に坐せりと史に稱せ惟方天皇を奉じて潛に六波羅に幸せしめ官軍力を展るを得しは光頼與りて力ありと

格言

佐藤一齋の曰く節義は剛毅の人に存す

參照

宋の吳安國は太常少卿を以て金に使す金人盟を渝るに値ひ拘留して之を脅服せ安國毅然色を正しくして曰く我が首は得べし我が節は奪ふべからず唯誠を竭し王事王命に死せるを知る安ぞ敢て辱しめられ

んと金敢て犯さず

(二五)情を發して畫扇を湖中に投ず

〔學藝〕

池無名字は貸成京都の人あり世に大雅堂と稱せ書を善くし畫を巧みにせ書は晉唐の古帖に刻意し結體飄逸自ら一家を成し畫法は梅道人倪雲林の間に出入し專ら氣韵を以て主とおせ山水尤清絶あり世人爭て之を購ひ零縑斷楮と雖寶とし重ぜざるは無し是れより先き狩野氏

土佐氏世世畫家の長と爲り其の畫法皆宋元諸名家に出でしが師弟授受の間寢く其の眞を失ひ卒に變じて笨俗とおりしかバ有志の士其の弊を矯めて之を復せんと欲せれども力以て之を振ふに足らざりしかバ獨貸成は才最も高く志最篤く勤あて法を支那に取れりされど時の人未之を信ぜずある時畫扇を齎らして尾張美濃諸州に遊びしも一握も售れざりしかバ困みて歸り近江の瀨田の橋に抵りし時悉く扇を水

（問）想像シテ圖ヲ作ルト實物ニ就テ之ヲ摸スルト其益如何

中に投じ夫れより益發憤苦勵して遂に古人の堂奥を窮むるに至る名聲隆隆然として海內に震ふに至れり是れより畫を言ふ者宋元諸家を以て準據と爲さざる無きに至る貸成性山水を好み又身體も健康おりしかバ諸國の名所を探ぐりて層巒重嶺たりとも其の高峻を極めざれば止まず最富士山を愛し屢之に登りしが每に其の登路を異にし榛莽を披き狐兎の蹊を攀ぢ人跡の未至らざる所を究めたりされバ先後作

る所の富士山の圖凡一百帖横側正偏其の妙を極めざるはなく天下の絶筆と稱せらる

（二十八）「アウトボン」の勤勉能く禍敗を克復す

（學藝）

合衆國にて名高かりし禽學者「アウトボン」は常に其の學に心深くして他にゆくごとに禽鳥を捕へてこれを摸寫しければ數年の間に夥多の種類を寫しそなへたり一日他の國に往くとて其の圖畫を皆箱に入れて友人にあづけ置きたるが數年を經て歸り來り其の箱を開き見れば

〔問〕事ヲナシテ抽折ヲ受クルハ吾志ヲ助クルモノナルヤ否ヤ

こはいかに鼠その中に巣を作り數百千の子を生みて圖畫をば悉く嚙み破りて全く存せるものひとつもなし「アウトボン」この爲めに志くじけて數日欝欝として樂まざりけるが又た心を勵まして小銃鉛筆など携へて山林にゆきては禽鳥を捕へつつさきの如く其の形を畫きけるに三年に滿たずしてまた箱の内に滿ちたるがその精巧前に寫したりしには優りたりとぞ

べて些少の蹉跌にあひて沮喪して止むときは萬の事其の巧を遂ぐることあたはず「ワット」氏が蒸汽の發明「コロンブス」氏の亞米利加州を發見せしも皆千苦万難にあひて撓まず挫けず唯堪忍の一途より成し得たるものあり天下何ぞ容易に爲し得べき者あらんや故に此の「アウトボン」を鑑みて中止の意氣を生ずることなかれ

格言

西諺に曰く燧石も打たざれば火光を發せず

西諺に曰く勤勉は好造化の母なり

參照

米國の畫工「マルチン」始め大畫圖を作るや貧困に迫り殆んど餓死せんとせるもの數べあり嘗て數日食せず飢渴甚し嚢中纔かに一銀錢あり以て麵包を買ふ店主忽ち麵包を奪ひ還し銀錢を擲棄して曰く咄是れ

質錢ありと「マルチン」始めて其の質錢ありを聞き帳然として舍に歸り食櫃を傾けて僅に喉を濕ほを得たり後數日大畫圖遂に成り大に名を世に顯はせり

(二一七)朱娥身を殺して祖母を救ふ

(貞 懲)

宋の世に朱娥といへる女ありその母早く身まかりて祖母に養はれたり娥が十歳のときその里に朱顏といへるものあり祖母と不和ありしがある日朱顏刀を閃めかして祖母を殺さんとせしが一家驚き恐れて皆逃げ去りしに娥獨り泣き叫びて祖母を後ろにかばひ手に顏が衣をひきその身を以て顏が刀を壓して寧ろ妾を殺せも祖母を赦し玉へとて頻りにおれを隔てける程に身に數傷を負しかどもおを顏の衣を挽て放たざるにより祖母は辛うして逃れたり顏恚りて娥が喉を刺しておれを殺せりそのおと上に聞こければ粟帛をその家に賜ひけりその

(問長上凶暴ノ實ニ遇フヲ見バ奮テ之ヲ救ハンカ或ハ恐レテ之ヲ避ケンカ)

後會稽の令娥が孝義を思ひその像を古の孝女曹娥が廟の傍へに立てしとぞ

(二八)身を殺して孝貞兩ら全くす

(貞淑)

袈裟ば源渡の妻あり其の頃遠藤盛遠と云ふ士ありけるがある日他へ往く路にてはからずも袈裟を見しに忽戀慕の心起りてやまず袈裟の母は衣川とて盛遠の叔母ありければ其の家に至り劫して袈裟を得むとせり衣川驚き怖れて

(問)人ヨリ强迫ラ受クル時ハ已ノ志ヲモ曲グベキカ如何

汝我を釋さば今夕必汝を袈裟に逢ハせむと約して盛遠を返しさて袈裟を召びて詳に盛遠の意をのべ且つ小刀を授けてわれ盛遠が言を聽かずば彼れ必我を殺さむ今彼の手に死あんよりハ寧汝の手に死せん汝亟に我を殺せといへば袈裟悲に堪へずして子の親に代りて死をるは固より其の分あれば兒よく計らん必憂ひ賜ふあとといひて承引きけり日暮に及びて盛遠來りければ袈裟給きて夫あらん内に他人に從ふ

はうじろめたき業あれバ今夜渡に髪あらハせて醉ひ臥さしむべし君潛に寢所に入り髪を探りて殺したまへと云ひて家に歸り渡に酒を勸めてふさせ置き自吾が髪を解き洗ひ夫の服をきて臥したり盛遠夜半に入り來てたやすく首を斬り持ち出でてよく見るに案に違ひて袈裟ありけれバ大に悲み直に僧とおれり是即文覺ふり袈裟一女子を以て其の身を殺し親の難を救ひ夫の命に代りたる其の孝行貞操世に倫ふ

きものといふべし

格言

諺に曰く死すべき時に死せざれば死に勝る辱あり

參照

唐の鄭義宗の妻盧氏舅姑に事へて婦道を得たり嘗て夜强盜數十人あり杖を持ち鼓譟し垣を踰て入る家人悉く奔竄せ惟姑去るゑと能ハず盧氏刃を冒し往て姑の側に

至る盗に撞撃せられて幾んど死を賊去て後家人盧に問ふ何ぞ獨り懼れざると對て曰く人の禽獸に異なる所以のものハ其の仁義あるを以てなり鄰里尚相救ふ姑棄つべけんや萬一禍に遭はバ豈獨り生くべけんや

(二九)兄を救ふて盗を感ぜしむ

(備後)

嘉永二年の頃大坂府松屋町にとみといふ幼女あり兄ハ仁三郎とて十五歳なり又五歳と三歳との弟ありて父は早く死せしかば母一人にて紙類を商ひて生業となしけりある夜强盗三人刃を拔き連ね來てとみが家の表の戸を蹴放して内に入らんとせるに母は早くもその戸の音をきゝて三歳の兒子を懷にして裏口より逃げ去りぬ仁三郎もおれにつづきて出でんとせるを强盗引き捕へて金はいづくにあると劫し問ふに吾ハ此の家の童奴なれバ知らずと言ひて

〔問〕孝悌ノ誠ハ盗賊ヲモ感ゼシムベキヤ如何

教へざりければ盗は刃の背にて二つ三つ擊ちたりとみ此の時歳僅に八歳ありしが驚き悲しみて嘗て親しき人々より年玉おど贈られける小玉銀入れたる袋を取り出て弟を後に蔽ひ盗の傍に走り寄り金ほしくばこれを參らせん兄上をば許し給へ若許さずとおらば代りに我を殺してよといふにさしもの强盗もうおづきて世にはめづらしき幼女もあるものかないかに許してハ取らせずやと言ひ合せて其の儘に立

去りぬ後に大坂町奉行にて盗を捕へて其の罪を訊問じけるをり此事を語りしかばとみを呼出じて其の始末を問ふに盗の言ふ所と異らざりければ幼少の身にて危險をも懼れず弟を護り兄に傷つけさせじとせし友愛の情賞とるに堪へたりとて白銀若干を賜ひけり後此の事四方に聞ゑければ大坂にて富有の聞ゑある炭屋某とみを請ひて養女とおじけるとぞ

(三〇)兄弟死を爭ふ

〔懶道〕

漢の時に大饑饉あり菜蔬粒穀共に絶たれバ人と人とあひ食む程あり其の時張禮といふ人あり一日弟の孝とともに他に行く途中盗人に遇ひ以盗人ども口々にこれを殺して喰はんといふを見て張禮のいひけるは家に老母あり未朝食せずねがはくは我等のかへりて食を供せるを待て供へればらバ乃來りて死につかんと弟の曰兄は痩せたり孝は肥たり乞ふ兄に代りて死ぬんと兄またこれを爭ふていひけるは吾

はもと殺さるゝこゝとを許せり弟を殺せこゝとあかれと互に死を爭ふ盗人大にれどろき感じて兩人を許したりとかや生を偷みていやしくも免るゝ人の常情兄弟死をあらそうは骨肉の眞性あり盗不義と雖また人あり獨心を動かせこゝとあからんやこれ已の善を推してよく人を感化せしものと謂ふべし

格言

斯邁爾斯曰く道義の勇は戰

塲の勇に勝る

參照

晉の王詳王覽が兄弟共に至て孝なりしが覽の母は祥の繼母ありけれバ只覽のみを愛して祥を遇せるゑと無道ありしかども覽ハ兄に事ふるゑと少しも怠らず母時として祥を笞つゑとあれバ覽必泣て之を諫め其の祥を苦使せる折は覽もまた兄と共に使はれ又非理を以て祥の妻を使ふ時は

覽の妻も亦往きて之を同くせ後祥の譽漸高かりしに母彌病みて暗に毒酒を飲ましめんとせしに覽之を察して其の酒を取らんとせしかバ母奪ひて之を翻せり是より後は母より祥に食を與ふれバ覽必先之を嘗め試みたりかく兄弟孝友の心深かりしかバ其の名大に顯れて祥ハ大保となり覽ハ光祿大夫となりけるとゑん

尋常小學校教師用修身書第六終

益城郡小學校教師印

明治二十年二月十日版權免許
全　年七月　出版
明治廿一年二月　再版
全　年四月　三版

（修身書第六）
定價金十五錢

熊本縣士族
編纂兼出版人　辻　敬之
東京下谷區練塀町十四番地

東京府平民
編纂人　岡村增太郎
東京神田區松永町十九番地

發兌所　教育書專賣所　普及舍
東京下谷區練塀町十四番地

製本用紙印刷紙屬經
普及舍版權
發賣十五年以後

明治21
ッ3
柳門易塗

M